百合子賞　佳作　受賞作品

日出づる処の空

郡山市立郡山第五中学校

晴　天

なぜかこの国日本では
十月十日は晴れらしい
観測し始めてから
この日は晴天が続いている

戦後のたったの十九年で
ボロボロだった日本は大きく回復した
東京五輪という素晴らしいステージで
それは世界に伝わった
世界の国々は驚いた
もしも私がそこにいたら
きっと私も驚くだろう

日本の空は
それをずっと見ていたのかもしれない
きっと見やすくするために
前日まで大雨だった空は
雲ひとつない空へ変わったのかもしれない

そう考える私の上で
今年の十月十日の空も
雲ひとつない青だった

曇　天

曇りというと人は大体
黒や灰色を想像する
いつもの青い空と違うので
少しどんよりとした気分になる

しかし私の中にはもう一色
「白」という曇りの色がある
白は何もない最初の色
今この詩を書いている紙のように
黒や赤といった色がよく写る
絵の具でだって白は大活躍

夏の暑さや台風を
ずるずると引きずる日本（にっぽん）に
夏にも秋にもなりきれない

ちょっぴり不器用なこの国に
「もうすぐもうすぐ秋ですよ」と
秋風と共に教えるのだ

それに気付いた日本(にっぽん)は
穏やかな秋へと変わっていく

可愛らしい桃色や白の秋桜が
ポツポツまとまって咲いている
そんな川沿いの通学路を
朝夕帰っているときに
私はこのことを考える

雨　天

雨が降ると気温が下がる
雨が降ると気持ちが落ち着く
別に気分が下がる訳ではない
物事を冷静に考えることができるのだ

文化祭の実行委員で
この時期大変な私には
雨音がいつも隣にいる

文化祭で配るしおり作りで
教室やパソコン室にいるときも
先生の話を伺うために
校内のあちこちを探し回ったときも

会場準備で椅子を並べるために
たこ糸を真っすぐ張っているときも
いつも外では
サーという雨音が聞こえていた

文化祭当日の開始直前
私は会場の体育館のギャラリーで
クラッカーを鳴らすため待機している
この日の空は雨ではない
カーテンのすき間から
光が漏れてくる程の晴れだった

いよいよ文化祭が始まる
生徒会の人達の合図に合わせて
「スターティン！」と
流行りの言葉を叫ぶのだ
これまで私を支えてくれた
仲間と先生に感謝して

私はクラッカーを思いきり引っぱった
同時に叫んだ
感謝する相手に雨音を追加して

降　雪

クリスマスに正月にバレンタイン
冬の大きな行事には
雪が降っている方が
少し嬉しくなってしまう

何故雪が降ると嬉しくなるのだろう
雪が降ると積もることがある
そうすると子どもが雪で遊ぶ
勿論私も遊ぶ
だってとっても楽しいから
犬も庭を駆け回る
そう昔の人も歌っていた
雪が嬉しいのは皆一緒らしい

ところが雪は厄介なところもある
車や道路の雪かきだ
これだけは私も苦手なのだ
何故こんなに積もるのか
そう思いながら
一生懸命雪を片付ける

ふと私は思った
この雪も遊ぶ雪も
元々は同じ空から降ったものだ
降った所が違うだけで
差があるというのは可哀想

そう思ってから私は
家の前の雪を使って
小さな雪だるまを作ってみた
本当は駐車場の雪を全部使って
大きなものを作りたかったけど
これからもたまに作ろうかな
そう心の中でつぶやいて
私は家の中へ入っていく

虹

雨が上がって空を見ると
たまに虹がかかっている
虹を見て思い出した
虹が七色に見えるのは日本位ということを
初めて聞いた時は驚いた
外国では五色や三色らしいのだ
日本人の色への意識の高さ故のことらしい

たしかに日本人は色を見つけるのが上手い
同じ染料を使っているのに
違う色が沢山名付けられる
色の名前もきれいなものが沢山だ

きっと日本語がきれいだからではないか
そう感じた
数千年前から私達の祖先が
ずっと受けついできた言葉
音読み訓読みがあり
漢字・平仮名・片仮名がある
この複雑で美しい言葉
それをずっと守っていきたい
それは世界共通だ

虹の端には宝が埋まっているらしい
その宝はきっと
その国々によって様々だ
だがそれらに共通することは
それが人々を幸せにすることなのだろう

そう思う私の周りは
沢山の小さな幸福で満ちている

（指導教諭／佐々木　英　人）

《作品の意図》

この作品は、私の昨年度の十～二月に体験したこと思ったことを「晴天」から順に季節が流れていくように書きました。「晴天」は社会の授業で聞いたこと、「曇天」は十月の中ばころに教室から見た景色、「雨天」は文化祭へ向けての約一ヶ月の間の思い、「降雪」は冬休みに家族で雪かきをしたこと、「虹」は二月に行っていた卒業式の合唱練習で教室移動をしていたときに毎日のように虹が見えていたときをテーマにしています。

題名も空が移り変わっていく順に並べ、時の流れを感じることができるようにしました。

《作品の寸評》

作品名「日出づる処の空」は、古の日本をイメージさせ、五篇を通して日本の過去、未来へと思いを巡らせるものになっている。また、天気の移り変わりに沿って作品を並べるという構成に工夫がみられる。

各作品には発想に個性が感じられ、印象的な表現が随所にみられた。「晴天」は、十月十日に焦点を当て、過去の東京五輪と戦後の日本の復興を取り上げた。「世界の国々に日本の回復を見せるために晴れた」という独特の表現が注目される。「曇天」は、曇りを「白」という色にたとえ、「日本に秋を運んでくる」と表現し、「雨天」は、「雨の日は物事を冷静に考えることができる」という感覚が新鮮である。「降雪」では、「降った場所の違いで、嬉しくなるもの、厄介なものと差があるのは可哀想」という発想がおもしろい。「虹」は、日本人の色彩感覚の豊かさを日本語の美しさ・複雑さに発展させ、それを守っていきたいとする独特の感性が光る。

（審査員／齋　藤　ゆきい）